

ハッピー・クリスマス

蓮見

その日は、一日中視界にもやがかかっているようだった。

「……それでさー聞いている？ 恵実」

これからの予定に気を取られすぎていて……だから。

肩を掴まれて思いきり揺さぶられたところで、ハッと気がつく。あ、しまった。

「！ ああ、うん、聞いているわ」

彼女の様子をうかがうと、完全に腹を立ててしまっていた……後悔が胸いっぱい広がる。ああ、やってしまった。

「……全然聞いてなかっただろ」

目の前のポニーテールの少女、吉村美佐が人一倍大きな瞳を細め、こちらを思いきり睨みつけている。低い声が、その雰囲気、怖い。

「……ごめん」

気圧されてうつむくと、彼女はふん、と鼻を鳴らし、登校してきたクラスメイトの方へ行ってしまった。

視界の端で赤茶けたポニーテールが揺れている。相当怒

っているらしい。私が読書を始めたと同時に、肩をいからせて教室を出ていった。

いつもどおりクラスメイトたちが騒いでいる。それほど騒げるネタがあるのが不思議だ。決まった時間に登校し、決まった時間まで授業を受け、合間合間に休憩時間を挟みつつ、決まった時間に下校するだけの毎日ののに。

誰かが誰かのことを好きで、誰かと誰かがつきあっている、でも最近、別れて……。飽きないのだろうか。いつも同じようなネタで盛り上がって。そんなの、どうだっ
ていいじゃないか。

読書するには教室内は騒がしすぎる。全く本の内容が頭に入ってこない。ため息をついて時計をチェック。担任がやってくるまで、あと三分。私は本を閉じて、寝たふりをすることにした。あいかわらずクラスメイトどもは騒がしい。こういうところは苦手だ。けれど、目を閉じれば、いっただって楽しい世界が広がっている。大好きなお家。大好きなお部屋。大好きな……おばあちゃん。

『えみちゃん、今日のおやつは干し柿だよ』

心の中のおばあちゃんはいっただって微笑んでくれる。も

ちろん、それは現実世界でも変わりない。おばあちゃんはとても優しく、私のことを守ってくれる。そんなおばあちゃんが私も大好き。

学校は、嫌い。授業なんて全部子供だましの茶番だし、クラスメイトどもはみんな騒がしいだけが取り柄の馬鹿ばっかりだし、何より……ここには、おばあちゃんが居ない。

『わあい、えみ、干し柿大好き！』

優しいおばあちゃんに満面の笑みで答える。必要以上に子供らしく。必要以上に甘えて。おばあちゃんに依存しているのは、私もよく分かっている。いつかは離れなければいけないことも知っている。けれど、今はおばあちゃんが居なくなることなく、考えたくもなかった。おばあちゃんが居ない世界なんて、そんなの——……。

「うっわ、何か泣いてるよアイツ」

「寝てるんじゃないんだ。何考えてんだろ、きもっ」

聞こえてきたのは、甲高い嘲笑だった。

嘲笑の対象が私だということは間違いない。だって、机に突っ伏しているのは私以外に一人も居ないから。

「……ホント、なーんでいつも寝たふりしてんだろ？」

「友だち居なくてやることないじゃん？」

キヤハハハハハハ……。その言葉一つ一つが胸に刺さる。

教科書には悪口を書かれる。体操服が時折消える。シューズを履くときは気をつけないといけない。大抵、画鋲が入ってるから……。それが、私の日常。

犯人は知っている。美佐の取り巻き連中だ。彼女らの気に障らないように、できるだけ目立たないように過ごしているのに、なぜ私をわざわざ狙って嫌がらせをしてくるのか。意味が分からない。

……さらに、なぜ美佐が私を親友扱いしてくれるのか。これが一番、解せない。私と違って美佐は明るいクラスの人気者なのに。私なんか絡んでたら、美佐まで嫌がらせを受けるかもしれない……。でも、それなのに美佐は笑うんだ……。『気にすんなよ、私は私のやりたいようにやっただけだぜ！』——って。口は悪いしデリカシーはないけど、たぶん根は単純明快で良い奴、なんだらう、と信じていた。こんな私に絡むのも、たぶん、赤ん坊以来のつきあいだからだらう。以外に理由が見当たらない。

突然、取り巻き連中が笑うのをやめた。

「ああああああクソがつ！」

教室のドアが悲鳴を上げる。直後、けたたましい音を立ててガラス窓が揺れる——美佐だ。美佐が帰ってきたのだ。思わず顔を上げて様子をうかがった。

彼女の機嫌はますます悪くなっていた。何度も何度も、掃除用具入れを蹴つ飛ばし、怒りをぶつけている。古びた金属製のそれがベコツという音を立てて凹んだ。

「……………！」

しばらく美佐は天を仰いでいた。虚ろな、目、だった。何を考えているのか分からない表情で、彼女は天井のシミを静かに見つめていた。

なぜだろう、怖い。睨みつけられたときよりも、けっして合うことのない視線が……怖かった。

彼女が振り向く。でも、やっぱりその目は虚ろだ。

「な……なに、なに、それ、みんな、どうして黙っちゃってんの、はは、うふふ、あーあーあー」

何事もなかったかのように、彼女はいつも通りの人懐っこい表情に戻った。途端に、クラスメイトたちもひきつった笑みを浮かべる。

「み、美佐……？ な、何かあったの？」

おそるおそる、一人が尋ねた。

「なんにもないよ、なんにもなかった！ ははは、それより先生来るよ！」

にかあつと笑った美佐がそう言った瞬間、その言葉通り、担任が教室に入ってきた。

「吉村あ！ 今日は宿題やってきたらうな？」

「せんせーいごめんなさーい、昨日はホットヨガで忙しかったのでやってませーん」

席に戻った美佐は、にやつきながら全く反省していない口調でそう言ってみせる。クラス中がどつと笑いに包まれる。こらーつと怒鳴る担任の声。そこでまた爆笑が起こる。

いつも通りの、教室の風景。いつも通りの、茶番。

けれど、どこかが違っていた。違ってするのは、どこだろう……私にはわからない。

……だって、この教室に私の居場所なんてないのだから。

テレビドラマの展開を、観ているだけの人間が変えられないのと同じ。演じなければ……自分の役割を演じなければ、劇に参加することすらできない。

でも、あれ、おかしいな。ドラマなら台本が決められてるはずだ。事前に脚本家が描いたシナリオが存在するはず。

……馬鹿馬鹿しい。所詮、みいんな茶番じゃないか。

「はいっ今日は十二月二十四日、火曜日だ。今日が何の日かわかる人！」

「はい先生！」

美佐の取り巻きの一人が手を挙げた。

「クリスマスイブ！ 夜にはサンタさんが来る日！」

「その通り。今日はクリスマスイブ、学期最後の授業だ」

教室のあちこちから歓声上がる。

「だから、先生からもプレゼントをあげようと思う。欲しい人は手を挙げて！」

歓声が一段と大きくなり、私を除く全員が手を挙げた。

いや、違った。美佐は挙げていない。前の席で、つまらなそうに外の景色を眺めている。

「……山田と吉村はいらんのか？」

突然話を振られ、ひゅ、と喉から音が漏れる。

「私はいっぱいプレゼントをもらうので、センセのプレゼントはみんなにあげます！」

さっきまでの様子はどこに行ったのか、美佐が元氣よく答えていた。その答えにクラスメイトどもがざわめく。

美佐はことあるごとに言っている。父は世界的に有名な教授で、母は国際的な大会で金賞をとったピアニスト。だから、美佐の家はお金持ち……うちのクラスの奴なら誰でも知っていることだった。

「……そうか、山田は？」

「わ、私は、あの、大丈夫です、大丈夫です……」

何が『大丈夫』なのか。支離滅裂な自分の答えが恥ずかしくなる。美佐のときとは違ってかわって、クラスメイトどもはクスクス笑っている。笑うな、笑わないで……。

「よし、わかった。先生からのプレゼントはコレだ」

言うなり担任は、教卓の奥から大量のプリントを出してみせた。ブーイング。これがプレゼントかよーという声。

そんな声を担任は一喝して黙らせた。あまりの迫力に、クラスメイトどもはしぶしぶそのプレゼントを受け取る。

こうして日常はいつも通りに過ぎていった。ただ、美佐の表情は最後までうつむいていて読めないままだった。

「遅かったな」

終礼が終わって、いそいそと向かった先——裏門で彼は待っていてくれた。

……御坂文雄くん。少し前に図書館で知りあった男の子。あのとき出会わなければ、卒業するまで絶対に関わらなかつたであろうタイプの人……隣のクラスの人気者で、スポーツ万能だけど、勉強はからっきし。

「先に行っちゃおーかと思つたぜ」

「な、な、そんな、あんたが先に誘つたくせに」

思わずそんなことを言つてしまつてから、後悔する。

どうしてまた今日もかわいくないことを……馬鹿な、恵実。せつかく誘つてくれたのに、これじゃ、きつと……。

「ほら、行こうぜ」

でも、彼はかわいくない私の言葉なんて、聞かなかつたことにして、手を差し出してくれた。

おやおずと伸ばした手を、ぎゅつと彼が握る。

やっぱり、まだ、慣れない。

「あ、あ、え、うー……」

まだ、(こ)によ(こ)によ口の中で言っている私に、にかつと

笑いかけ、彼は強引に歩き出した。

——十二月二十四日はクリスマススイブ。

——だから、二人で過ごそ。

先週、彼はそう言つて私のことを誘つてくれた。

いつもなら、絶対首をぶんぶん振つていたところだけど、魔が差して、思わず頷いてしまつたんだ。頷いた瞬間、後悔した。ああ、そんなはずなのに。彼は私のことをからかっているだけなのに。だって私、ブスだから。美佐に教えてもらわなくてもよく知つてる、そんなこと。けれど、彼の誘いは悪い冗談とか、そういうのじゃなかつた。今なら、わかる。

「恵実、最近どうだ？」

「えつと……」

彼と図書館以外で会うのは、実ははじめてだ。同じ×学校に通っているけど、たくさんの友だちに常に囲まれている彼に、声をかける勇氣はなくて、時々見かけたときに観察してただけだから。

「おばあちゃんと、遊んでた」

それ以外の答えは存在しない。『教室での私』を答えるのは、あまりにも惨めすぎる。

「ああ、良い人だよな恵実のばあちゃん。公民館に行ったら、いつも挨拶してくれんだよな」

「思わず彼の顔を見上げた。彼はそんな私の視線に気づかず、ただおばあちゃんの良いところを、つらつらと挙げていく……なんでだろう。とても、嬉しい。誰かがおばあちゃんのことを語るとき、私はいつでも心の奥底で、砂を噛むような気持ちになるのに……。どうしてだろう。彼なら、彼なら、許せる気がした。」

「ここだ」

団地の一角に目的地はあった。ここが、彼の家。私の住んでいる家と違って、モダンな感じだった。

「お、お邪魔します」

「挨拶なんて良いのに、どうせ誰も居ないんだからさー」

「で、でもっ」

おばあちゃんが、よそのお宅を訪問するときは、必ず『お邪魔します』と挨拶をしてから入るのよ、って教えてくれ

たから。早口でなぜか多少焦りながら説明すると、彼は、ふうんと言って、ふかふかのスリッパを出してくれた。

「うわあ……！」

リビングに通されると、まず目についたのは大きなケーキだった。ただのケーキじゃない。ちゃんとクリスマスツリーと小さなサンタさんが飾られている。

それだけではない。部屋中にクリスマスの飾りつけがされている。大きなツリーのてっぺんにはキラキラ輝く綺麗なお星さま。これは、全部彼が一人で準備してくれたものだろうか。思わず尋ねると、彼はにかつと笑って「いや母ちゃんと一緒にやったんだ！……彼のお母さんに心の中で感謝。」

こたつに入って待っていると、キッチンから温かい紅茶を持ってきてくれた。

「……良い匂い」

私好みの甘いミルクティーの中に、さらに彼が持ってきてくれたイチゴジャムを落とす。これが最近私のハマっている飲み方。本式では舐めながら飲むそうだけど、紅茶に直接入れた方が、好み。

……しあわせ、だなあ。

部屋は寒かったけれど、暖かなこたつのおかげで、気にならなかった。

「……何やる？」

紅茶を楽しんでいると、彼がゲーム機を持ってきた。

「……これ」

ソフトの山から指さしたのは、よく美佐と遊ぶシューティングゲーム。戦闘機を操って、待ち受ける蜂型の敵を倒すというもの。害虫退治みたいで楽しいから、結構好き。

「うわ、コレ難しいぜ、俺買ってから後悔したもん」

「……できると思う。二人なら」

瞬間、彼はびっくりしたような表情を浮かべた。ど、どうして？ 変なこと言ったかな。何か気に障るようなことを……。

あわてて「や、や、あの。腕を疑ってるわけじゃなくてね、いつも美佐と一緒にやってるから」と言い訳したものの、彼の表情は変わらず。

「う、う、あの、あのあの、あのねっ」

こんなとき美佐なら上手く切り抜けてしまえるのだろう。

彼女なら地雷を踏まない。もし踏むとしたら、狙っているときだけ。

「……」

視線の向けどころが見つからなくなって、とうとう、うつむいてしまった。だめだ。だめだ、こんなんじや、いつもみたく、そう、『教室での私』と同じじゃないか。

彼は言ってくれたのに……。こんな根暗でブスな私に『自分を卑下してはいけない』と、『自分をないがしろにすることは、同時に自分を大切に思ってくれる人をないがしろにすることと同じだ』。

……『どんなときでも前を向いている』と。

教室でそんなふうには振る舞うのは難しい。だって、全部、嘘になる。だからせめて、彼の前でだけは嘘を吐かず、なるべく前を向いていよう、と思っていたのに……。

「むぎゅ」

「こらっ山田恵実、下を向くんじやない」

彼は私の頬をつまんで笑っていた。

「むぎゅむぎゅむぎゅ」

手足をじたばたさせて、やめろと訴えたものの、彼はま

すます笑って私の頬をもてあそぶだけだった。

「おお、よくのびる」

「むぎゅうー」

最大のぼしたところで、彼はにかつと笑ってから手を離した。

「な、何すんの、やめなさいよ、×学生かつ」

なんとか態勢を立て直した私は、彼に詰め寄って抗議。ここ、こういうのはちゃんとやっておかないと。

「俺も恵実も×学生だぜ」

勝ち誇る彼の表情に、ちよつとムツ。仕返しに思いっきり、でこびんを食らわしてやった。

「いたつ、いや恵実こんなことするキャラだっけか？」

「そうよっ私は……」

——？　こんなこと、するキャラだっけ。

大げさに痛がりながら、床を転がりまわる彼を眺めながら、ぼんやり考える。あれ？　私、こんな子、だったかな？

「えーつと……」

彼の瞳に、うんうん唸ってる私の姿が映ってる。醜い。

恥ずかしい。そんなに見つめないでほしい。慣れてる美佐

とかなら別に気にしないんだろうけど、私はこんなの、慣れてないんだ、やめて、やめて。

「……た、たぶんこういう、キャラ、じゃないのかな」

なんとか絞り出した言葉は、ブーンというゲーム機の起動音で遮られてしまった。

「……」

沈黙が気まずい。テレビにはオープニング画面が延々流れつづけている。次々に敵を撃ち墜としていく戦闘機。機影がレーザーに反射して、目に痛い。

「……いいと思うぜ、俺は」

満面の笑み。彼は……フミくんは、それでも私のことを受け容れてくれた。

「本に夢中で無愛想な恵実、教室では静かな恵実、さっきみたいに暴れん坊な恵実……俺は全部いいと思う！」

「……褒めてない」

彼のまっすぐすぎる言葉が恥ずかしくて、つい、ぷいと横を向いてしまった。

——でも、うれしかった。すごくすごく、うれしかった。

私の味方は、世界中でただ一人、おばあちゃんだけだと

思ってた。けど今日、増えた。もちろん世界で一番大切なのは、おばあちゃんということに変わりはないけれど……。

……彼も、大事な人だ。

「じゃ、レーザー系のこのキャラな」

「ちよ、勝手に決めないでよ！ 私ホーミング性能ついてないとクリアできないんだから！」

そのまま決定ボタンを押し、勝手にキャラを確定させてしまった彼は、悪びれもせず、にかっと笑った。

「……うう」

レーザー機体は操作が難しい。敵の位置を完璧に把握していないと、一気に弾幕に押しつぶされてしまうのに……。

「なあ恵実」

「……ん？」

おいでおいでをするように、手招きしている。やっぱり変更してくれるのかなあ、と思って顔を寄せた。

「目、つぶって」

「え……」

彼は真剣な顔で私を見つめている。……こ、これはもしかして、いや、もしかして、なくてもっ。そんなのまだ早

すぎる。

心の中でもう一人の私が——なぜかその姿は美佐に似ていた——ぎゃあぎゃあわめいている。やめるやめる、こんなの、こんなの、山田恵実じゃない、恵実はブスで一人ぼっち、彼とつりあうような子じゃない、って。

でも、なんでだろう。また、魔が差したのかな……？

そっと——目を閉じてしまった。

「恵実……」

ささやくような彼の声が、耳にくすぐったい。そのまま震える肩をそっと掴まれる。

「……あう」

彼の息遣いが如実にわかる、その距離まで、ゼロ距離まで……おでことおでこが、こつんとぶつかる。まつ毛が擦れてくすぐったい。

このまま、私——……。

——ガシャーン！

「今の音……」

思わず目を開き、音の方向を振り向く。

「！ あ、あーまたか。トラックかな」

一瞬前まで、そこにあつたはずの『彼』が……遠くなる。

「小石とか跳ね飛ばして行くからさー。困ってるんだ最近」

「……そ、そうなの」

「ちよつと見てくるぜ」

なぜか早口で言い終えたのち、立ち上がった彼は私の脱いだスリッパにつまずきかけ、ごまかすように笑った。

どうしたんだろう、彼らしくない。

「メリークリスマス、恵実！ プレゼントはそこだ！」

こちらに振り返った彼が叫ぶ。見ると確かにツリーの下にリボンのついた箱が置いてあつた。

足音が遠ざかっていく。完全に聞こえなくなったところで、私はほう、とため息をつく。途端に心臓が鐘をうつように、ばくばくしはじめた……うう、胸がつぶれそう。

頬が熱い。苦しい。でも、嫌な苦しさじゃない。

とりあえず、プレゼントを開けてみた。中に入っていたのは、私が今一番読みたいと思っていた、ファンタジー小説。なんで欲しいものがわかったんだらう？

深呼吸して息を整える……彼は、ずるい。いつだって、私ばかり緊張することになるから。私が慣れてないのを

知ってるくせに、ぐいぐい近づいてくるから……。

ふと、彼がめずらしく、つまずきかけていたのを思い出す——ああ、そっか。彼も焦っていたんだ。私だけじゃなかったんだ。彼も彼なりに緊張してたんだ。

「ふふっ」

笑みが漏れた。と、同時に安心した。私ばかり、なんてそんな不公平なのは嫌。だって、私一人でどきどきして、彼は平気だったとしたら……馬鹿みたい、だもん。

まるで裸で踊っているような、そんな感じ。

二人だから……二人だから、素敵なんだ。

ランドセルの中に忍ばせたプレゼントを眺めながら、私は彼の帰りを待つことにした。どのタイミングで渡そうかな。帰ってきたらすぐ、は芸がないかな。いっそ帰る直前にしようかな。楽しみはあとに取って置いた方がいい、とも言うし。ふふっ。

——今年のクリスマスは、どんなクリスマスよりも、ハッピーなものになりそう。

——だって、もう私、一人じゃないから。

「死ぬ」

——狙い通り。二つのシルエットが重なる寸前、照準をアイツの瞳に合わせた弾丸は、窓ガラスに見事命中。無惨にヒビが入った。ざまあ。

私——吉村美佐はエアガンを懐にしまうと、すぐさま物陰に身を隠した、と、ほどなくして玄関の方から足音。足を怪我してるって言ってたけど、案外早いじゃん。

「うっわ……ヒビいってやがる」

心底不快そうに顔をしかめてる。ざまあみろ。

「やっぱトラックかな……シカトとか……なつてないぜ」

「私もそう思う」

「うおっ吉村!？」

電柱の陰から出てきた私に、ずいぶんと彼は驚いているようだった。人よりも二倍くらいオーバーな動作。以前なら愛しいその動作。でも今は……。

「……何驚いてんだよ、文雄」

茶化すように言っても、彼は呆然と見つめているだけだった。……ああ、もう。イライラする。

「冬休みの宿題のプリント持ってきてやったんだよ、南セ

ンセが文雄に渡すようになって、さ」

「……あ、ああ」

——南の野郎、放課後呼び出しやがって『プレゼント』と称して強引に押しつけてきやがった。しかも隣のクラス
の文雄の分まで。そんなことだろうと思つて拒否したのに。

『吉村は一組の御坂と仲良かったよなあ』

『え……ああ、はい』

『じゃあ持つていってくれないか？』

そう言われたら、うなずかざるをえなかった。

……だって文雄と私は、親友、だから。

「えー、なんでクラスの違う俺に？ 宿題なら、もううちのクラスの先生からもらったぜ」

「文雄が南センセの授業さぼってるからじゃん？ 知らないよ、理由なんて」

押しつけるようにプリントを渡すと、文雄は困惑顔で受け取った。

「え……じゃあ、なんで吉村が？ 別の奴でも良いじゃん」

「……っ」

心のどこかで、ぱきん、という音がした。

『親友だから』……どうしてその一言が出てこないのか。私と文雄は親友だ。それぞれ顔が広いけれど、一番仲の良い友だちなはずだ。

「あーあ、恵実、ううん、山田の方がよかったな」

「……！」

「あ、いや、もちろん冗談だぜ」

顔色を変えた私に、鈍い文雄もさすがに気がついたらしい。すぐにフォローの言葉が降ってきた。

でも、フォローになんか、なっていない。文雄のことはよく知ってる。だって親友だから……。さっきのは、本音だ。

「プリント、ありがとな、吉村」

「……うん」

「さっきのは、冗談だから。気にすんなよな」

「……気にしてないよ、全然」

笑顔を作って「じゃ」と言って手を振ると、文雄もこちらに手を振り返した。

「……文雄」

家に入ろうとしていた文雄の背に、ぽつり、呼びかける。

「……なんだ？」

少しうっとうしそうな声が返ってきた。知ってるよ、その理由——早くアイツのところに行きたいんでしょ？

「私、ガラス割った犯人知ってるよ」

「え？」

文雄が驚いて振り返る。

「誰だよ、それ」

「……推測だけだ。隣町のヤバいおっさん、まだ捕まってないんじゃない？」

……隣町、祭東町では去年から殺人事件が頻発している。正体不明の殺人鬼は、未だ逮捕されていない。ヤバいおっさん、と言ってはみたものの正直正体不明だから、間違ってるかもしれない。けど、たぶん、正解。

……だって、一人歩きの女を狙った強姦殺人鬼だから。

「文雄さ、トラックがナントカって言ってたじゃん？ ヤ

バいおっさん、移動してきたんじゃない？ こっちに」

文雄の顔色がみるみるうちに変わった。

「そんな……」

「ま、夕方ぶらぶら歩くのには気をつけるこったね、ああ、

文雄は男子だからいいかもしれないけど、女子は、ね」

「クソが……」

反射的に、ぎこちない笑みを見せるそいつの瞳をカッターで切り裂いていた。クソが、ふざけんな。ブスのくせに。

そいつはいつもと同様、ひきつったような笑みを浮かべてプリクラの中に収まっていた。むかつく。イライラする。

『えみ』と虹色のペンで書かれた隣に、『みさ』と書かれた私が写っている。恵実とは違う、明るくて人懐っこい笑顔。

どう見てもかわい。私——美佐の方がかわい。いのに。

どう考えても恵実がブスなのに。どうして。

恵実と美佐、二人おそろいのポニーテール。親友親友言うけれど、友情を感じたことなんて一度もない、そんな関係。けれど私以外友だちの居ない恵実、クラスの中で唯一話しかけてあげる私に依存してるから、基本的に私の言うことには逆らわない。おそろいのポニーテールも私が恵実に強制しているものだ。理由？ そんなの目に見えてい。引き立て役が居ると魅力がきわだつからだ。

——ふと歪んだ視界の端に、ぐしゃぐしゃになった映画のチケットが飛びこんできた。きつかり二枚。【クリスマスアニメ特別三本立て】。

隣のクラスに取り巻きと一緒に乱入したときに、偶然耳

に入った会話……文雄は、確かにそのアニメの話で盛り上がっていた。家に帰って急いで調べて、今放送されている

アニメの中でも一番人気のもの、ってことを突き止めた……調べる過程で、ファンサイトを荒らしたけど。

祭東町の映画館ではあまりアニメを扱わない。いつもならとても嬉しい。キモオタに会ってしまったら、ううん遭ってしまったら、一日中イライラすることになるから。

でも、そのときの私にはちよつと都合が悪かった。

だって彼……文雄は、アニメ以外なら映画の途中で寝てしまっただろうから。そもそも誘いに乗らない、って。つきあい長いから、親友だから、分かってた……。

だから私、このチケットを取ったんだ。

【クリスマスアニメ特別三本立て】——の【イブ限定カッターシート】。

チケットを取るまでは楽勝だったけど、肝心の文雄を誘うのは難しかった。だって休憩時間終わったらすぐクラスに戻っちゃうし、放課後はどこかに消えちゃうし……。

——もし、断られたら。けっしてそんなことない、と思

つてた。ううん、違う。チケットを取った直後は自信満々だったってだけ。三日過ぎた頃、不安が生まれた。一週間が過ぎて、不安しかなかった。怖かった。怖くて、誘えなかった。断られたら？ そのときは、どこにこの気持ちに向けたらいいの……？ 私らしくない。怯えてた……。

ううん、いつだってそうだった。アイツ……文雄のことを考えると、なぜか弱くなる。強い吉村美佐じゃなくなってしまう。

胸が、苦しくなる。

——そして迎えた十二月二十四日、すなわち今日。

でかでかと刻まれた『カップル』その四文字を指で隠して、心臓のばくばくを必死に押さえながら、誘ったのに。

『悪い、先約あるんだ！』

今でも耳に残る、アイツの声。

乱入した隣のクラスのだ真ん中。ラブレターの如く、差し出したチケットの向けどころは、永遠に消えてしまった。

私は覚えている。無遠慮なクラスの連中の視線を。矢の如く突き刺さる残酷なそれを……。

え、どうということ？ ——信じられなかった。

私、断られたの？ 嘘だ。嘘に決まってる。こんなの、信じられない……信じたくない。私が、文雄をすぐに誘わなかった、ううん、誘えなかったから？ そんな、そんなの……。

群衆は困惑顔で私を見つめていた。はたして嘲笑を浴びせていいものか。こっそり視線を交わして、密かに囁きあっていた。どうしよう？ こういうとき、どうすればいいんだろう？ ……私も知らない。わからない。この差し出した手を、どうやって引っこめればいいのか、分からない。

『悪いな、吉村。もうずっと前から決めてたんだぜ！』

——ずっと、前、から。

ふ、と笑いが漏れた。なんだ、無駄だったんじゃないか。私がすぐに文雄を誘ってしようが、いまいが、文雄は断っていた。ぜーんぶ、無駄。このチケットを手に入れるまでの努力も、悩んだ時間も、用意したプレゼントも……。私の努力、ぜーんぶ無駄。

『ふふ……ふ、あは、はは、あはははは……』

勘違いしたのか、クラスの連中も笑いはじめた。ゲタゲタ、という嘲笑ではなかった。抑え気味の、引きつり笑い

だった。

『おい、吉村。そろそろ先生来るぞ』

『あ……そ、だね。クラス戻るわ』

両手を、機械仕掛けの人形のように、ぎこちなくポケットにつっこんで、まわれ右。

教室のドアを閉め、寒い廊下に出る。全くの、全くの無駄——……。

『クソが……』

猛烈に怒りがこみあげてきた。

「なんで。どうして。なんで私が断られなきゃいけないの。おかしい。こんなおかしい。絶対おかしい。だいたいクリスマス誘いを断られるとか、振られたも同然じゃないか。それを、隣のクラスの奴ら全員が笑った。ブスどもがブスどものくせに。この吉村美佐が、振られるところを嘲笑された——許せない。私から文雄を横取りしやがった女が……。憎い。憎い。憎い。絶対、許せない。

『キャハハハ……アイツ、ばっかじゃねえええの』

『……た振りとか、マジきんもー』

自分のクラスのドアに手を掛けようとした瞬間、耳に入

ってきたその台詞。自分に向けられたものではないことはわかっていた。けれど、無性にイライラした。

衝動のままにドアを蹴り飛ばした。開いた。目の前にはぼかーんとしたアホ面を浮かべたクラスメイト。カッターナイフがあつたら、切りつけていたかもしれない。首を、動脈から少し外れた箇所を、ズバーツて。致命傷は負わせない。苦しめて……。

「——美佐！」

突然、後頭部に衝撃。向こうの壁まで吹っ飛ばされる。何が起きたのか分からない。あれ……ここ、教室じゃない。

そう……ここは……寒い、私の家。

隣の部屋からドンという音。うるさい、壁ドンしてくんじゃねえ……そっちは昼夜構わずリアルAV垂れ流しのくせに。

「んだあ、この写真は!？」

……親父だった。親父が帰ってきたのだ。上半身裸で、にやにや笑っている。背中に観音様を背負った、底辺特有の嫌な笑みだ。頭をかばいながら、私も負けずに親父を睨みつける。

いつのまに帰ってきたのだろう。もしかして組を首になつたのか？ それだったらざまあだけど。ああ、酒臭い。裸なのはそのせいらしい。あー最悪。

「……別に、クラスの連中と撮った写真だよ」

それを聞いた瞬間、親父は何がおかしいのか爆笑した。

「色気づきやがって。お前、男の趣味最悪だな」

「……っ！」

親父が指さしていたのは、文雄だった。頭がかつと熱くなる。許せない。よりにもよって、お前がそれを言うなんて。絶対に。文雄を貶めていいのは私だけだ。

「お、こっちの女はマシだな、ブスなお前よりは。なんで目が切り裂かれてんだ？ 風俗の写真みたいだな」

「……ああ。恵実だ。間違いない。」

「やめろ」

「は？」

「やめろっつってんだろ」

右手にカッターナイフを隠し持って、警告。次、やめろつて言わせたときには、お前の首をかつ切つてやる。

殺気だった私を、退屈そうに眺めてから、親父は私にく

るりと背を向ける……酒に酔っぱらっていてくれてよかった。普段の親父なら、反抗した時点で私をボコボコにするだろう。

「……お前、援交でもしてるのか？」

玄関、と呼ぶにはおこがましいほど狭いスペースで、ク

ソ親父は振り返り、言った。

「は？ してるわけないだろ」

声が震えたのが自分でもよくわかった。

「そのコート、×学生の小遣いで買えるもんじゃねえだろ。俺の女が好きなブランドだ」

「……っ！」

にやり、と笑って親父は出て行った。あとに残されたのは、私、一人、だけ。

流行最先端のファーコート。ずっと欲しかったそれが、急に汚いものに思えてきて、瞬間、床に叩きつけていた。

頭の中で、また誰かが暴れている。痛い、痛い、頭がずうっと、ズキズキ、誰かのせいで、ずうっと痛いんだ。

さまよわせた手が、ピルケースをとらえる。鎮痛剤、鎮痛剤が必要だ。

「あ」

空っぽだった。本当に、空っぽ。一つもありやしない。最近効かなくなっていたけど、あるとないのでは全然違う。そうしているうちに、どんどん痛みは強くなってくる。どうする、どうすればいい、どうすれば。

日の入らぬ町営アパートの四畳半部屋。私は痛みを転がりにまわる。ささくれ立った畳が体中に当たって痛い。だ、頭の痛みの方が何倍も強い。隣の部屋からの音がやまない。ドン、ドン、とこちらに注意してくる。やめろ、うるせえ底辺層。どうせお前も底辺だ。麻薬中毒者か風俗嬢かその両方、なんだろ。だったら静かにしてろ、色情狂。「……やだ、やだ、やだ、痛いよ」

無意識のうちに、唇が動いた。こんなの私じゃない。私じゃないのに。吉村美佐は強い子なのに、どうして……。

「痛い、痛い、痛いよ、助けてママ、ママ……」

黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ。黙れ！

何を甘ったれたことを言っているんだ、まるで恵実じゃないか。十分恵まれておきながら、それでも幸せを欲するなんて。ブツサイクのくせに、クソコミュ障のくせに。

唇の暴走を止めたくて、衝動的に左手につけたレブリカのリストバンドを放り捨てて、手首をカッターで切りつけていた。無数の線をなぞるように、痛みを刻みこむようになるべく深く。

「あ」

……ミスった。血管のごく近くを切ってしまったらしく、いつもよりも相当出血が激しい。すさまじい量の血が畳に飛び散る……だけど同時に頭が冷えていく。唇はもうママ、なんてふざけた音を漏らすことなく、固く引き結ばれていた……当然だ。親父にボコボコにされて以来、未だ帰らないクソ女のことなんか期待したって無駄だ。だいたい一度も見たことがないんだ、顔すら知らない女のことなんか知るもんか……『ママ』こと、クソ女を想像すると、なぜかいつも恵実の『大好きなおばあちゃん』……死に損ないバアの微笑みが一番最初に浮かぶ。善人ぶったその笑顔、吐き気がする。死ぬ。

本当に私の周りは殺したい奴らばかり。ヤクザの親父、私を産んでおいてそのまま捨てたママ……ううん、クソ女、馬鹿なクラスの奴ら、昨日までの親友・文雄、それに私か

ら文雄を奪いやがったエセ親友の恵実……。

むかつく、むかつく。どうしてアイツなんだ。どうして私じゃないんだ。恵実なんかブスなのに、私こんなにかわいいのに！

映画の誘いは断られたけど、私、めげなかった。文雄が家族思いつてことは知ってた。どうせ家族でホームパーティーとやらに興じてるんだと予想してた。それを、『先約』なんて格好つけた言葉でごまかしたんだと……思ってた。

南センセから預かったプリントと、頑張って買ったプレゼントのエアガンを携えて向かった先——文雄の家。あろうことか、その家にはアイツが先回りしてやがった！我が物顔で、温かい部屋の中、文雄と仲良さげに寄り添っていた！

ガラスの向こう、今にも重なりそうなシルエット。

衝動のままに弾を撃ち込んだ。アイツの目を狙って。アイツの目が二度と彼の姿を映すことのないように。

彼の笑顔を間近で見られるアイツの目がうらやましい。

彼の言葉を近くで聞けるアイツの耳がうらやましい。

彼と優しいキスができるアイツの唇がうらやましい。

私より幸せ。百倍くらい幸せ。何の悩みもなく、与えられた幸せをただ貪っている、何も考えていないその顔を見ると、イライラが止まらない。

ずっとずっと、寒かった。私は暖かい部屋でくつろげなかったから。電柱の陰に隠れて見てるだけだったから……。なんで私ばかり。どうしてこんな目に遭わなきゃいけないんだ。どうして……こんな地獄に生まれなきゃいけないんだ。私だって、幸せに——。

「……ふふっ」

悲観している場合じゃない。そう、私はすぐ幸せになれる。やり方はよく知っている。

痛い奴らのサイトを荒らしたりとか、掲示板を地獄絵図に変えたりだとか……ともかく私より不幸な奴らを作り出して、眺めることだ。荒らして晒して、ストレス解消しなくっちゃ。いつだってイライラで死にそうなんだから。

これは、私——吉村美佐だけに許された、特別な遊び。そのへんにおもちゃはたくさん転がっている。人間という名の、私のおもちゃが。なるべくもがき苦しんで、そして死ぬところをじっくり観察しよう。

パソコンを起動する。掲示板を開いた瞬間、後悔。間違えた……最悪なことにカップルの集うその掲示板は、いつもにも増して熱狂していた。お互いがどれくらい愛しあっているのか、どれくらい大切に思っているのか、いちいち報告してくるカップルの書きこみに、嫉妬にまみれたレスがつけられていく——嫉妬？ ばっかじゃないの。嫉妬は負け組がするものだ。更新されつづける掲示板の応酬を見つめた末に……私は気づいた。

このままじゃ、私も負け組じゃないか。そんなの、そんなの絶対許されない。吉村美佐が、私が負け組側に入ること……いつだって絶対的安全圏からそいつらを唾うのが私だったのに……そうだ。文雄が断らなければ、恵実がでしゃばらなければ、こんなことにはならなかった！ アイツらの！ アイツらのせいだ！

……復讐だ、復讐しよう。アイツらの逢瀬は邪魔して、ぶっ壊してやった。すでに気まずい関係になっているに違いない。ざまあみる。

アイツらを殺すとか、そんな幼稚なことほしない。私の復讐は、アイツらよりずうーと幸せなクリスマスを通りこ

てやることだ。本当に幸せな、クリスマス。その話をこれ見よがしに、アイツらに、だけじゃなくて、クラスの奴らにも自慢してやろう。クリスマスが台無しになった奴らの前で、幸せなダンスを踊ろう。

——私は別の掲示板に移り、ある書きこみをした……レスはすぐについた。

ほくそえみながら、化粧を始める。さっきまでの私にさよなら。本来の美人な私が戻ってくる。やっぱり、私、美人だ。かわいい。ブスな恵実とは違う。

「……吉村さん、ですか」

部屋を出てすぐ、顔色の悪い男に呼び止められた。無視して行こうとすると、途端に進路を塞がれた。

気持ち悪い男だと思っただけど、なかなか顔立ち自体は整っている。ただし、目が駄目。完全に虚ろだ。確かこいつ、隣に住んでいる山本とかいう奴だったような……。そうか。さっきから壁ドンしてきたのはこいつか。

「いつもいつも、うるさいんですよ、迷惑です」

「……それは、どうも」

「ぺこり、頭を下げて行こうとすると、男は勝手にしゃべり出した。狂気じみた表情だった。もしかしたら、変な薬でもやっているのかもしれないと思えるほどに。」

「姉さんが大きな音を嫌がるんです、姉さんは俺以外の声を嫌がるんです、姉さんに負担を強いているのはわかっています、知っています、けれど姉さんは優しいから俺のことを許して、圭ちゃんって呼んで微笑んでくれるんです」

「……壁に向かってしゃべってるゴミ。は？ 姉さん？ そういうプレイは部屋の中だけでして。二人ぼっちで、ずっと絡みあって腹上死しろ、色情狂。」

「ブツブツ呟きつづける色情狂の隣を通り抜けて、目的地に向かう。こっそり振り返る。まだ、壁に向かってしゃべりつづけていた。きもつ。」

吉村美佐はずっと勝ち組でいないといけなかった。だから自然と日の入らぬ町営アパートは豪邸になったし、ヤクザの父親は世界的に有名な教授にいきなり昇進したし、クソ女は国際的なコンテストで優勝したピアニストになった。

——本当のことは、いつだってすり抜ける。

皆、それに気づかないから、苦しむ。でも、その方がいい。他人が苦しんでいる姿は、私を幸せにしてくれるから。

目的の人物が近づいてきた。

「せ・あ・ら・り・ん！」

……檜宮せあら。援交掲示板での名前だ。トレードマークのポニーテールをほどき、黒髪ウィッグをつけた私の姿は、誰が見ても吉村美佐には見えなかっただろう。

「……おじさま！」

いつもよりもオクターブ高い声を、無理矢理喉奥から引きずり出して、につこり、作り笑顔。うん、上手くできた。

客——金だけはたんまり持ってるらしい中年親父は、脂肪の乗りきった体を縮め、ささやいた。

「映画は行かなかったのかい？ 前回あんなに頑張ったのに……チケット、高かったんだらう？」

「……おじさまと、デートしたかったから」

……死ねよ、キモ中年。勘違いしてんじやねえ。

腹の中で思いつき罵る。もちろん表情は笑顔のまま。

「行こつ、としあきおじさま！」

フウフウ唸りはじめた中年の腕を取り、私はホテルへ向

かつて走り出した。

途中、かなりの数のカップルと出くわした。

……『会えなかった』？ 『切なかった』？ お前らの不幸ごっこを見てるとイライラする。

——銃を持っていたら、たぶん乱射していたと思う。

「……二万でいいよ」

ベッドに腰掛け、舌足らずな声でそう言う。中年は困ったように頬をかいた。

「うーん。最近お小遣い減らされちゃってさあ……一万じやだめ？」

ここまできて値切るとは。二万円でも相当な妥協だ。最初は五万円だった。それがだんだん下がってきて、今や二万なのだ。それをさらに値切るのか。腸が煮えくりかえったが、無理矢理笑顔を作り、

「……んーそれは無理」

腕組みをして、ふい、と横を向いて拗ねたふり。

「！」

いつのまにか中年の顔がすぐそこまで近づいていた。

「せあらりん……その代わりと言っちゃなんだけど」

にたついた気持ち悪い笑顔。悲鳴、もしくは抵抗する間もなく、口の中に湿った紙が放りこまれた。舌がその湿り気を感じとった瞬間、しびれるような感覚が口の中いっばいに広がる。

「……せあらりん、これは幸せになれるお薬だよ。おじさんたちからのクリスマスプレゼント！」

「あ……ひゅ、ひゅひゅふう……」

今まで味わったことのないくらい、すさまじい高揚感が体全体を包む……ああ、なんて幸せなんだろう……目の前の世界がキラキラ輝いて、そのまま歪んで……。ドアが開く。いっせいにたくさんの中年オヤジが入ってきた。そんなの全然聞いてない、知らない……でも、もうどうでもいいや。……だって、こんなに幸せなんだから。

……何もかもがきらめいている。世界って綺麗なものだったんだね、はじめて知った……お薬は怖いものだと思っただけど、簡単に幸せになれるなら、最初から……。

——こんなに幸せなのに、どうしてだろう。脳が蕩かされて、壊れていくような気がするの、ねえ……マ、マ……。

——まだ何も始まってないけど、終わりでいいや。

(終)

月刊缶じうすクリスマス特集号

2012年 12月 4日発行

編集人 渡科由太 蒼井天優 黒歴史

発行所 広島大学文団BOX